

## 「主体的で、対話的で、深い学び」に基づく 道徳的資質・能力を育む授業改善

—道徳科と総合的な学習の時間との連携による授業づくりの一考察—

齋藤 道子（現代教育研究所研究員）

### I はじめに

平成27年3月、道徳は「特別の教科 道徳」となり、現移行期間を経て平成30年度より、新学習指導要領に基づく指導がスタートする。この間、各校では、これからの時代に必要とされる資質・能力の育成を目指し、道徳科においては、「主体的で、対話的で、深い学び」を核とする「考え 議論する」道徳の授業改善に取り組んできた。

当初は、「考え 議論する」という言葉を意識するあまり、ディベート式や二項対立式等の「話し合い」に着目した取組が多く見受けられた。しかし、意見は活発に出されるが、果たして道徳的価値理解や自己のよりよい生き方についての考えが本当に深まっているのかという点が課題となり、現在では、学習指導要領の道徳科の目標に基づく「特別の教科 道徳」の特質を踏まえた授業づくりに取り組むようになってきた。

では、一体、「特別の教科 道徳」の特質を踏まえた授業とはどのようなものなのか。それは、道徳科の目標である「①道徳的諸価値についての理解を基に、②自己を見つめ、③物事を多面的・多角的に考え、④自己の生き方についての考えを深める学習を通して道徳性を育む」ということだと受け止める。これまでは、どちらかというところ「考え 議論する」とか、「多面的・多角的に考える」といった目新しい言葉に意識が向けられ、その言葉に対する解釈や、それに基づく授業改善が試みられてきたように思われる。しかし、それは、道徳科の目標を具現するための一つの視点や方法であり、本来、道徳科が目指す道徳性の育成を図るためには、より広い視点から考えていく必要があると受け止める。授業とは、「何のためにそれをするのか」、そして、その授業を通して「子供たちにどのような資質・能力を育もうとするのか」、さらに、そのために「どのような手立てを講じるのか」という指導者の明確な意図なしに十分な成果を上げることは難しい。

従って、本稿では、上記反省を踏まえ、道徳科の目標に真にせまるためには、どのような授業づくりをしていくことが大切なのかを、今後、21世紀を生きる上で必要とされる「資質・能力」という観点から再度考察し、そのために、どのような指導方法の工夫改善やカリキュラムの見直しを図っていく必要があるのかについて、検証授業を通して明らかにしていきたい。

### II 問題の所在

昨年度は、21世紀型学力について学んだ。そして、20世紀は、①「知識・技能」、②「思考力・判断力・思考力」、③「意欲・態度・実践」の3要素をコンテンツ・ベースとして、その育成を図ってきたが、今後、21世紀においては、子供たちが将来出会うであろう様々な問題や課題を主体的、協働的に解決する力の育成が必要であり、そのためには、上記①②③の3要素を適切につなぎ、活用する「資質・能力」、即ち、コンピテンシー・ベースに基づく力を育成していくことが重要であることを指

「主体的で、対話的で、深い学び」に基づく 道徳的資質・能力を育む授業改善

摘した。

そして、これを踏まえ今後、道徳科では、どのような道徳的資質・能力を培う必要があるのかについて考え、基礎力A「感覚・感情・体験・自己肯定感・自尊感情等」や基礎力B「外的対話・内的対話力等」(A・B呼称は筆者)の育成に加えて、21世紀型学力の②に呼応する「道徳的思考力」を高めることがより一層重要であると捉えた。

そこで、研究仮説を「基礎力A・Bを支えとする道徳的思考力を高めることができれば、道徳的価値理解・自我理解・人間理解が深まり、それによって、道徳的実践意欲や実践力も高まり、生涯に亘って自らのよりよい生き方や在り方を探究し、実践する道徳的資質・能力の育成を図れるのではないか」として、内容項目「親切・思いやり」で、総合単元的・課題探究型の道徳の授業を以下のようにデザインし、検証授業を試みた。

〈総合単元的・課題探究型の授業デザイン〉内容項目B-6「親切・思いやり」H28年度

学習テーマ	「思いやりの心」は、なぜ大切なのだろう。		
第1時	第2時	第3時	第4時
□事前学習 「思いやり」について考える	■道徳の学習Ⅱ 「父の言葉」	■道徳の学習Ⅲ 「エルトゥールル号の奇跡」	□事後学習 「思いやり」大作戦
学習課題①	学習課題②	学習課題③	学習課題④
○「思いやりの心」とはどのような心だろう。	○「思いやり」とは、相手のことを思えば、それでいいのだろうか。「思い」を伝え、示すために必要なことは何だろう。	○「思いやり」の心が大切なのは、なぜだろう。	○これまでの自分を振り返り、これからの実践について考えよう。

### 〈成果と課題〉

上記授業デザインに基づき複数時間に亘って「親切・思いやり」について授業を行い、時間毎に個々の子供の変容を記録し、整理、分析を行った結果、以下のような成果が認められた。

- \* 子供が課題意識を明確にもち、道徳の学習により主体的に探究心をもって取り組むことができた。
- \* 子供が道徳的価値を深く追究し、価値や自他や人間についての理解を多面的・多角的に深め、今後の自己のよりよい生き方についての考えを深めることができた。
- \* 一連の学習後、子供が日常生活の中で他者に思いやりの心に向けて、積極的に実践する姿が認められた。

一方、以下の点が課題となった。

- \* 事前学習や事後学習の時間を何の時間として取り扱うのか。
- \* 一つの内容項目に複数時間を費やすことで、内容項目の指導バランスはとれるのか。

つまり、昨年度の研究から明らかになったことは、学習テーマ設定の下に、道徳の授業を核として、その事前・事後に関連学習を組み入れ、道徳的価値について多面的・多角的に考えさせていくこ

とは、子供のメタ認知統合を促進し、それによって、道徳的価値理解・自他理解・人間理解が深まり、その結果、道徳的諸様相（道徳的心情・判断力・実践力）の育成において一定の成果を認めることができた。

しかし、その一方で、複数時間に亘る取組を、全て道徳の授業として取り扱うのかという、カリキュラム編成上の課題が見えてきた。新学習指導要領が、「授業改善」と「カリキュラム・マネジメント」を改革の両輪として明示している理由が、改めて理解された。

そこで、本年度は、上記課題に対する改善を図るため、昨年度と同様、道徳的思考力を高める上で確かな手応えがあった、押谷由夫氏提唱の総合単元的道徳の学習、並びにモラル・アクティブラーニングの手法を基に、再度、より広い視野から総合単元的・課題探究型の道徳の授業をデザインし、(ア) よりよい「生き方」についての考えを深める授業づくりと、そのための(2) 効果的なカリキュラム編成を視点に、研究に取り組むことにした。

### Ⅲ 研究の方法

1. 平成28年度の研究の成果と課題を踏まえ、本年度は、道徳性の根源と言える内容項目「生命尊重」で総合単元的・課題探究型の道徳の授業をデザインし、よりよい「生き方」についての考えを深めるための検証授業を行う。
2. 検証授業から得られた成果と課題を(ア)と(イ)の視点から整理し、「総合的な学習の時間」の時間と関連付けた、今後の道徳の授業づくりにおける新たな提案を行う。

### Ⅳ 本論

#### 1 道徳的資質・能力とは

「資質」や「能力」について文献やパソコンで調べてみると、一般的に「資質」とは、「生得的素質によって規定されている個人の潜在的可能性」とある。即ち、人間は、二足直立歩行や言葉を使用するという潜在的素質を有しているが、鳥類のように空を飛ぶという潜在的素質は有していない。このように生まれた時に既に有している規定された素質を指して「資質」と称している。

しかし、その規定されている潜在的な素質が、個人の可能性としてどのように開拓され、育まれるのかは未知数であるため、あらかじめ個の内面に規定されている素質と、今後、伸展するであろう潜在的な可能性とを総じて「資質」と呼ぶと捉えた。

また、「能力」については、「教育や環境などの後天的要因と素質的・生得的要因の複合の結果、形成されるもの」とある。即ち、人間は、二足直立歩行を行う素質を生まれつき有しているが、それは、生後の生活環境や教育や鍛錬等によって、個に具現される姿は様々であり、それが何らかの評価を伴って顕在化されるものを「能力」と呼ぶと捉えた。

この2つには、強い相関性があるため、この2つを分離して、それらの育成を図ることは難しいと思われる。そこで、図1のように「資質・能力」として一つに括り、その定義を「対象が変わっても、それに応じて汎用的に機能させることができる働き」とした。

また、この「資質・能力」には、「内容知」と「方法知」の2側面があると捉え、道徳的資質・能力を育てていく上では、この2つの側面からのアプローチが必要であると考えた。

「主体的で、対話的で、深い学び」に基づく 道徳的資質・能力を育む授業改善

## 2 道徳的資質・能力を育むための授業改善の視点

では、道徳的資質・能力を育むための道徳の授業をどのようにするのか。その方法を探るために、この2つの視点に基づいて図2のように整理した。

「内容知」とは、「知識・理解」に関わるものであり、道徳で言えば道徳的価値理解・自己理解・人間理解であると捉える。そして、それらの理解を深めるには、道徳的思考力が重要になると思われた。そこで、授業をつくる上では、この道徳的思考力を高めることを念頭に、道徳的諸様相である「道徳的心情」(情意面)・「道徳的判断力」(知識面)・「道徳的実践力」(行動面)の育成を図っていきたいと考えた。

また、「方法知」とは、「学び方」や「考え方」に関わるものであり、主体的に道徳的課題を捉え、他者や自己との外的、内的対話を通してその価値を多面的・多角的に考え、自己のよりよい生き方に実際に生かしていくための「学び方の習得」であると捉えた。

新学習指導要領は、この「学び方」について「主体的で、対話的で、深い学び」を核とした授業改善の必要性について述べ、さらにその方法の一つとしてアクティブ・ラーニングの手法に基づく授業改善を提示している。

加えて、「資質・能力」の育成の視点から、各教科や各種行事等で培う力とは別に、教科等の枠を越えて横断的・統合的に育む力の育成についても述べ、様々な教育活動との関連をより効果的に図るカリキュラムの再編成、並びにそれに基づく継続的なカリキュラム・マネジメントの必要性についても述べている。

そこで、図2に基づいて、さらに道徳的資質・能力を育成する道徳の授業づくりの骨子を図3のように整理した。

## 3 総合単元的・課題探究型の道徳の授業デザイン

上記を踏まえ、本年度は、道徳性の根源とも言える「生命尊重」の授業づくりに取り組むことにした。「生命尊重」の授業は、いじめや自殺等の深刻な社会的問題に直結するものであり、重点項目として取り扱う学校も多い。しかし、道徳的価値の深さに加えて、子供の発達段階に即した指導や、系

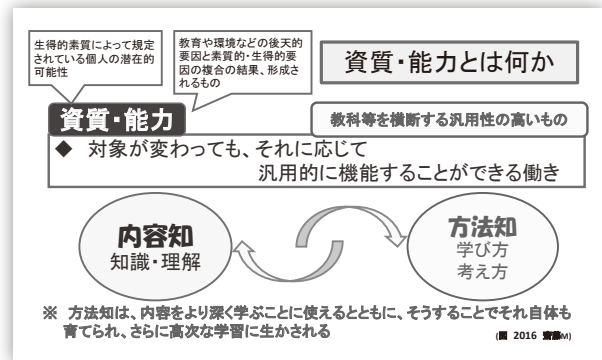


図1

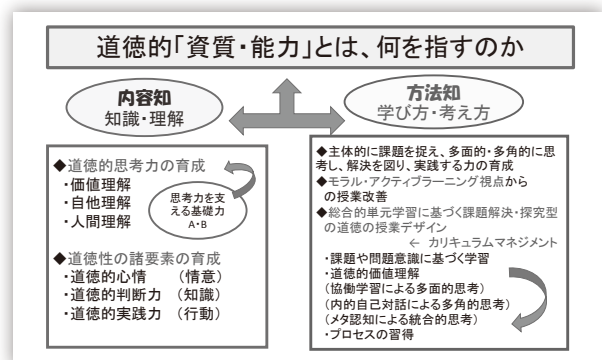


図2

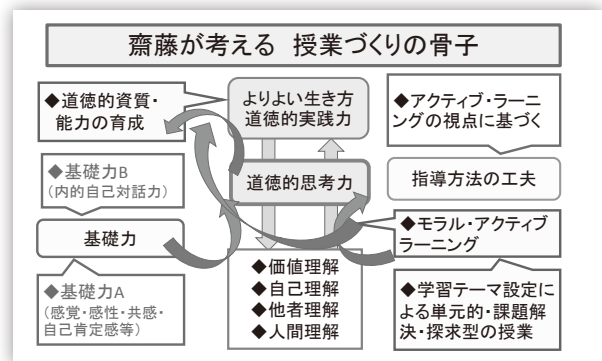


図3

統性を意識した段階的指導を行う上での課題も多く、道徳的価値についての内面的理解を深めることが難しいという教員の声も多々聞かれる。

そこで、本授業では、「主体的で、対話的で、深い学び」となるよう、「内容知」と「方法知」の2つの側面から、図4のような総合単元的・課題探究型の授業デザインを試みた。

しかし、ここで問題となったのは、やはり、カリキュラム編成である。総合単元的・課題探究型の道徳の授業は、複数時間に亘って道徳的価値に

ついての理解を深めていくため、その価値に関わる道徳的思考を高め、道徳性の育成を図る点では有効である。しかし、それを実践的な自己のよりよい生き方に繋げていくためには、道徳の授業の中だけでなく、より横断的で、統合的なダイナミックな学びが必要となってくる。

そして、そのためには、何らかの学習テーマ設定に基づく統合的な学びの場を設定する必要があり、それをどのように構築するかが、改めて大きな壁となった。

そこで、まず、実現の可能・不可能は別として、図5のような理想とするアプローチを考えてみることにした。

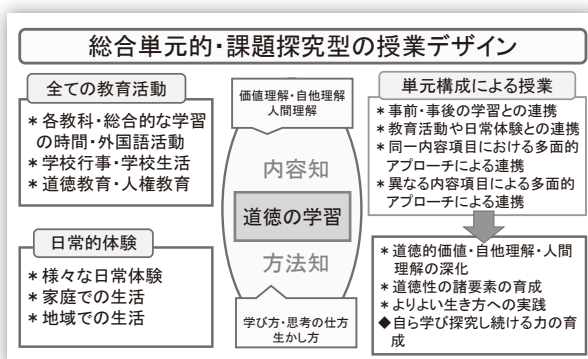


図4

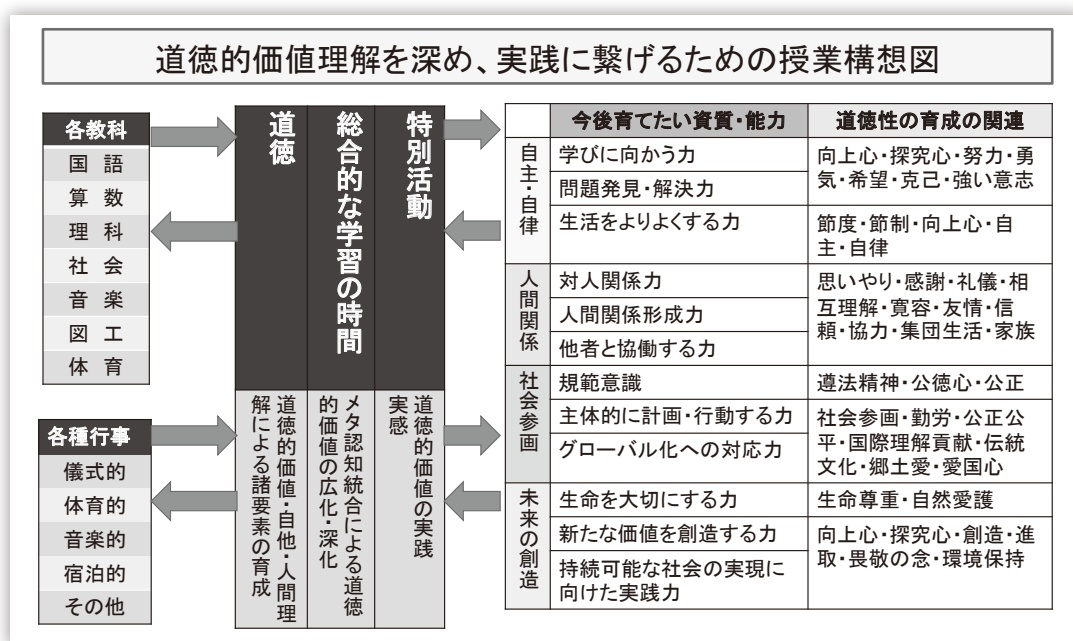


図5

図の作成に際し、まず、はじめに21世紀を生きる子供たちに培いたい資質・能力とはどのようなものかについて、平成27年9月に東京都教職員研修センターが発行した「多様な教育課題に対応したカリキュラムモデル」(小学校・中学校)を参考にして、それを今後育てたい資質・能力として引用した。

「主体的で、対話的で、深い学び」に基づく 道徳的資質・能力を育む授業改善

また、それを基にその育成に関連する道徳的価値をその右側に分類して整理した。すると、そこには、「育てたい資質・能力」と「道徳性」との間に強い相関が認められ、今後、子供たちが21世紀を生きる力を育むために必要な力を培うには、「知識や技能」「思考力・判断力・表現力」「意欲・態度・実践」等の力を分離して育成するのではなく、「何ができるようになるのか」、そのために「何を学ぶのか」、そしてそれを「どのように学ぶのか」の視点に立って、教科等の枠を超えて横断的、かつ統合的に育成するためのダイナミックな学びを展開していく必要があることが理解された。

そして、そのためには、道徳の授業のみに留まるのではなく、生涯に亘って自己のよりよい生き方や在り方を探究し、実践していくことを可能にする力即ち、その時々習得した道徳的価値理解や、道徳的心情・判断力・実践等を自ら活用し、様々な課題解決に汎用させる「道徳的資質・能力」の育成を横断的・統合的に図っていく必要があると思われた。

この意味で、今後、学校においては、各教科で培うべき力を明確にするとともに、各教科を越えて統合的、探究的に主体的な子供達の学びを促進する必要がある。そして学びに、ダイナミズムを生み出す「総合的な学習の時間」・実躍を通すことで学びをより確実なものとする「特別活動の時間」「各種学校行事等」との関連を意図的に図った「資質・能力」の育成を計画的・統合的に図っていく必要があると考える。

そのためには、横断的・統合的な視点に立ったカリキュラムの見直しや編成、そして、その成果と課題に基づくPDCAサイクルによる見直しや試行錯誤が欠かせない。この意味でカリキュラム・マネジメントは今後とても重要となってくる。そこで、以下では道徳の授業と「総合的な学習の時間」との関連を図り、内容項目「生命尊重」での授業づくりを具体的に考えてみたい。

#### 4 「生命尊重」の価値理解を深め、実践に生かす道徳的「資質・能力」の育成授業デザイン

生命尊重の道徳的価値理解を深め、実践に繋げるための授業構想図			
総合的な学習の時間	学習テーマ	「生命(いのち)」や「生きる」ことについて考えよう	
第1時:総合の時間	第2時:道徳の時間	第3時:総合の時間	第4時:道徳の時間
□「人間の一生」と「植物の一生」を比べてみよう。	□「家族」の視点から「生命」について考えよう	□自分の生命と家族とのつながりについて調べてみよう。	□かけがえのない「生命」を輝かせて生きよう。
ねらい	ねらい	ねらい	ねらい
○人間と植物の一生を俯瞰し、その違いを捉え、人間の生命や一生に対する興味関心を高め、学習のテーマを設定する。	○家族の視点から「生命」を見つめ、「生命」の大切さや、その「生命」どのように生かしていくことが大切なのかについて考える。	○「家族」の視点から自己の「生命」を見つめ、大切に育まれてきたことを理解し、これからの生き方を考える。	○自己の生命のかけがえのなさや、「生きる」ことの素晴らしさを実感し、自己のよりよい生き方について深く考える。
関連する教科・行事等 * 理科:植物の生長 * 国語:大造じいさんとがん * 道徳:自然愛護	関連する教科・行事等 * 家庭科:家庭での役割 * 道徳:家族愛 * 保健:病気の予防	関連する教科・行事等 * 道徳:家族愛	関連する教科・行事等 * 運動会 * 音楽会 * オリンピックパラリンピック教育 * キャリア教育

図 6

上記授業デザインを手掛ける時、子供たちはちょうど理科で、植物の生長について様々な条件制御の下で栽培し、実験を基に植物の生長に必要な条件や植物の一生についての理解を深めていた。

また、オリンピック・パラリンピック教育の関係から、オリンピック・パラリンピアン<sup>の</sup>の素晴らしい「生き方」に直に触れる機会が多々予定されていた。そこで、こうした学習やと関連付けて、学習テーマを「生命<sup>いのち</sup>や「生きる」ことについて考えよう」と定め、総合的な学習の時間の枠を設定し、その中に内容項目「生命尊重」の道德の授業を2つ組み入れて、他教科や学校行事等との意図的関連を図った総合単元的・課題探究型の道德の授業をデザインした。

第1時では、植物と人間の一生を比較させ、その違いをグループごとに話し合わせることで、人間の「生命」や「生きる」ことについての関心を高め、学習テーマの設定に繋げるようにした。

第2時では、事前に「生命尊重」に関わるアンケート調査を実施して子供の実態把握を行い、その結果を基に第2時の道德の時間の学習課題①の設定を行うことにした。そして、学習テーマについて深く考えるために、本時はどのような視点から考えるのかを明確にし、子供の学習意欲と主体的思考を深めていくようにした。

加えて、アンケート調査結果から、「家族」を切り口に「生命」に対する理解を深めていくことが有効ではないかと判断し、自作教材「その思いを受け継いで」（文部科学省「わたしたちの道德」に掲載）を用いて授業を行い、「生命」についての理解に加えて、昨年度の課題となった「生き方」についての考えをより深めていくようにした。

第3時では、これまでの学習を踏まえて、価値に照らして自分自身を見つめさせ、より統合的に自己の「生命」や「生き方」についての理解を深められるよう、自分自身についての調べ学習を課した。そして、「生命尊重」の価値や、これからの「生き方」についての考えを互いにシェアすることで、より高い道德的価値を捉えられるようにした。

第4時では、オリンピック・パラリンピック教育との関連を図り、競泳の大西順子選手との体験学習や、左手欠損の状態生まれ、同じく競泳で銅メダルを獲得した山田拓朗選手の講演会を通して「生命」や「生き方」について考える場を意図的に設定した。さらに、12月には、高橋勇市氏と共に自作教材「いのち輝いて」を用いて、再度「生命尊重」で道德の授業を行うことにした。そして、総合的な学習の時間の枠組の中で、学習テーマに基づく一連の総合単元的な道德の学習を行うことで、子供たち自身が主体的に「生命」や「生きる」ことについての理解を深め、日々の実躍につなげられるようにした。

## 5 一連の授業の実際の様子

### (1) 第1時の様子

子供達に、植物の一生と人間の一生の写真を提示して、その共通点と相違点をグループで話し合わせた。話し合わせたことで活発に意見交換がなされ、次のような気づきが見られた。

- ①植物は、種から始まり、新たな種を残してその生涯を終える。しかし、人間は人生の途中で子孫を残し、それをある程度まで育てた後に年老いてその生涯を終える。
- ②植物も人間も、生命の始まりとなる場所や時期を自分で選ぶことはできないが、少なくとも人間は、生まれた時から死に至るまでの間を自分の意思で生きることができる。
- ③植物は自分の意思でその生命を終えることができないが、人間は自分の意思で終えることもある。

植物と人間の一生を写真提示によって俯瞰させたことで、子供達は、人間の「生命」や「一生」に

ついて関心を高め、誕生から死までの間を「生きる」のだという概念を捉えることができた。また、それにより、学習テーマを子供と共に設定し、主体的な学びに向かう意欲を高めることができた。

## (2) 第2時の様子

前時で、学習テーマを子供と共に設定したことで、子供たちは、課題意識をもって意欲的に学習に臨んだ。そこで、第2時では、事前に行った「生命尊重」に関わるアンケート調査の結果を基に、学習テーマに迫るための本時の学習課題を新たに設定することにした。

アンケート結果から、4校に共通して次のような実態が見えた。

### ①「この世で一番大切なものは何か？」に対する

回答（4校の平均値）

1位：生命（46%以上）

2位：家族（30%程度）

### ②「なぜ、生命は大切なのか？」

1位：一度きり（有限性・唯一性）

2位：「生命」がないと生きられない(根源性)

### ③「自分の生命は誰のものか？」に対する回答

1位：自分のもの（60%以上）

2位：両親のもの } (34%程度)

3位：家族のもの }

また、別途調査から、90%を超える子供たちの家庭が核家族であり、祖父母と共に同居している子供はわずかだった。また、赤ちゃんの誕生や、身近な人の死に接している子供も少なく、子供たちの日常生活から「生命」に関わる事象や体験が、著しく減少していることが見て取れた。

こうした実態の中で、「生命」の大切さや「生きる」ことの尊さをどう理解させていくのか、学習課題づくりに苦慮した。体験の少なさの中で、子供たちは本当に「生命がなぜ大切なのか」を理解しているのだろうか。言葉では答えているが、それは、感情や情感を伴う実体験に支えられた深い価値理解ではないのではないだろうか、疑問がわいてきた。そこで、表面的な知的な価値理解ではなく、心と頭と体を総動員させながら、「生命尊重」に対する理解を深めていくことが大切ではないかと考え、押谷由夫氏が提唱するモラル・アクティブラーニングの視点から授業をつくることにした。

案の上、授業の冒頭でアンケート結果を提示し

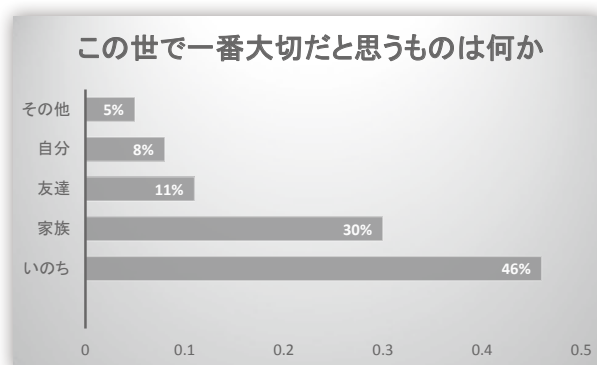


図 7

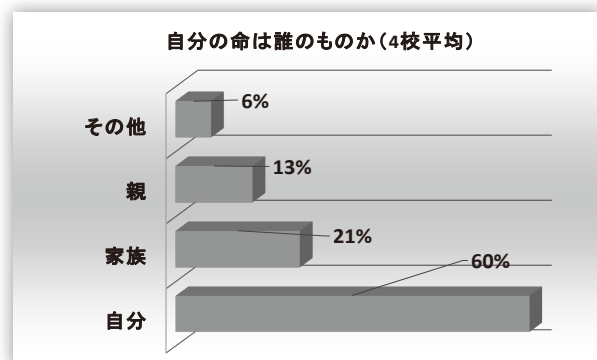


図 8

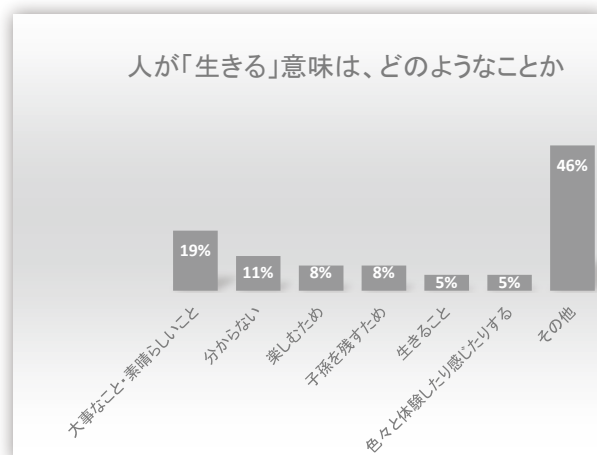


図 9



て子供たちに「なぜ生命は大切なのか」と問うと、積極的に答えはするが、どれも同じような言葉が返り、自分自身と真に向き合って価値理解を深めているわけではないということが実感された。

そこで、「生命」と「家族」との関連に着目させて本時の「学習課題Ⅰ」：「生命」の大切さや、どのように「生きる」ことが大切なのかについて考えようを設定して、授業を始めた。また、子供たちがより深く内面的に価値理解を深められるよう、文字による教材ではなく、イラスト映像を使用して子供の心に響くように教材提示を行った。加えて、板書では、子供の思考の流れを大切にして思考の可視化と構造化を図り、子供たちが話し合いの内容を整理し、論点を明確にしてより理解を多面的、多角的に深めていけるように工夫した。

また、後段では、この話が実話であることを告げ、大地とじいちゃんの写真をビデオムービーで提示した。じいちゃんが大地の誕生を心から喜び、深い愛情をもって小さい時から大切にかわいがってきた様子や、最期まで大地の幸せを願い続けた深い思いが子供たちの心に深く伝わり、涙する姿が多々見られた。

そして、終末では、本時の学習課題について問うた。子供たちは、これまでの学習を統合し、“自分のいのちは、自分だけのものではなく、家族やもっともっと遠い先祖から脈々と大切に受け継がれてきた、奇跡とも言える尊いものであることが分かった。これからは、自分のいのちを大切に毎日精一杯生かしていきたいと思った。”といった、道徳的価値理解に基づく、自己のよりよい生き方について考えた記述が多数認められた。

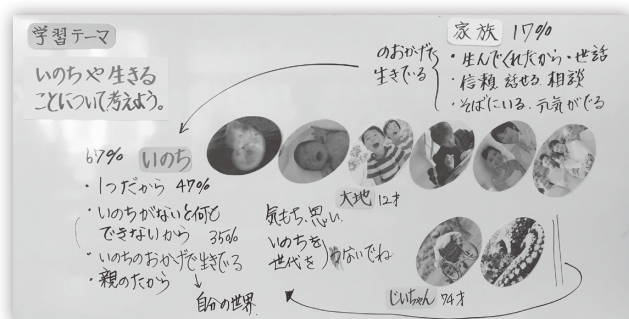


写真1



写真2

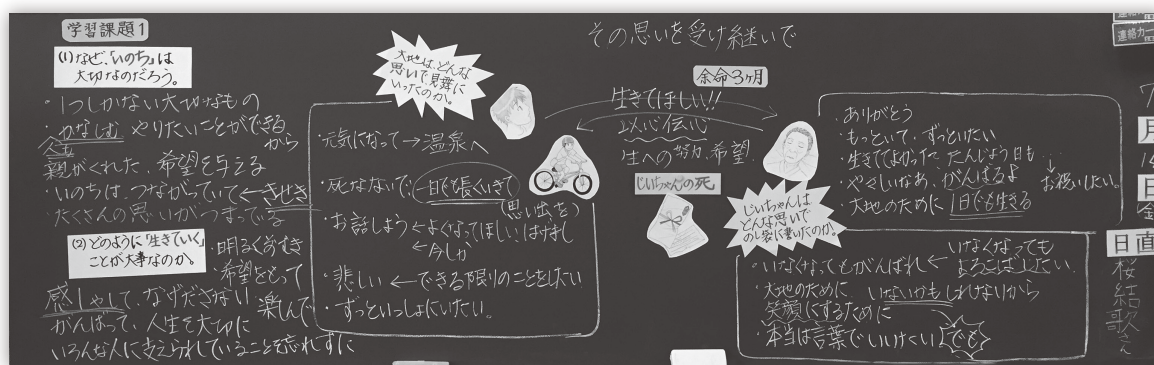


写真3

### (3) 第3時の様子

第2時の授業が終了した後、事後の学習として、家で自分の幼い時や家族との写真を見ながら、自分が生まれた時のことや、小さかった時のことなどについて家族から話を聞き、WSにお気に入りの写真を貼って自分の「生命」や、これからの「生き方」について考えたことをまとめさせた。

そして、それを授業で友達と交流し合うことで、他者に対する理解を深め、共にかけがえのない生命を大切に生きていこうとの思いを抱くことができた。

### (4) 第4時の様子

その後、オリンピック・パラリンピックの選手招聘による体験的な学習を経ることで、子供たちはそれぞれに「生命の尊さ」や「生きることの素晴らしさ」を感得し、自分に自信をもって苦手な事にも前向きに取り組む姿などが認められた。

そして、この12月には、2004年アテネ・パラリンピック男子フルマラソン、全盲の部の金メダリストである高橋勇市さんが、昨年に引き続き本校に来校し、4・5・6年生と道徳の授業を行い、その後、共に校庭を走る体験をすることになっている。17歳の時に失明の宣告を受け、31歳で全盲となるまでの経緯やその苦しみを知るとともに、夢や希望を抱くことで数々の困難を乗り越え、今なお走り続けている高橋さんの姿から、「生きる」ことの尊さや素晴らしさを深く感得し、さらに自己のよりよい生き方についての考えを深めることができると思われる。



写真4



写真6



写真7

## 6 成果と課題

### 〈成果〉

総合的な学習の時間の枠組みの中に、学習テーマを設定して道徳の授業を組み入れたことで、より一層道徳的価値理解を広げたり、深めたりすることができた。また、学習テーマについて各教科や行事と関連付けて道徳の授業で考えたことにより、思考のメタ認知が促進され、自己との内的対話をより深め、価値について考えたことや、これからの「生き方」について考えたことを自分の言葉で具体的にまとめることができた。

今回の検証授業は、事前に年間の指導計画の中に明確に位置付け、それに基づいて行われた取組ではなく、このような取組をすれば、もっと子供たちの道徳的思考や道徳的価値理解を深め、自己のよりよい「生き方」についての考えを深め、実践に繋げる道徳的資質・能力の育成を図ることができるのではないかと推測の下に行ったものである。しかし、手探りしながらも実際に行ってみたことで分かったことや得たことが多々あった。

従って、今後は、総合的な学習の時間の枠組みを活用して、学習テーマ設定の下に総合単元的・課

題探究型の道徳の学習を年に1つでも2つでも行い、実践を通しながらカリキュラム編成、並びにマネジメントをしていくことが大事なように思われた。

#### 〈課題〉

これまでは、総合的な学習の時間の中に道徳の授業を組み入れるという発想がなかったが、今回実際にやってみたことで、その効果を実感することができた。従って、今後は、総合的な学習の時間の目標：「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を怪異欠する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方（高等学校では「在り方生き方」）を考えることができるようにする。」を踏まえて、教科等の枠を超え、21世紀を豊かでたくましく生きるための「資質・能力」の育成を視野に、様々な学びをつなぎ価値付ける、いわゆる教育活動の「要」として機能する「道徳」の授業づくりに取り組んでいきたいと考える。

しかし、そこには、今後さらなる改善を図るべき以下のような課題がある。

- ①学校の教育目標に照らして、重点的な取り組み目標を明確にし、各教科・道徳科・総合的な学習の時間等で培いたい資質・能力とは何かを各校が吟味する必要がある。
- ②各教科で培う資質・能力とは別に、全教育活動を通して育む資質・能力を整理し、それをどこで、どのような手立てによって培っていくのかを全体計画において明確にする必要がある。
- ③資質・能力の育成を計画的・系統的に図るために、各学年での取り組み内容を明確にし、段階的・系統的にその育成を図っていく必要がある。

これまでは、どちらかという、道徳の授業そのものの改善についての研究を進めてきたが、そうした中で、いつもどこか限界や物足りなさを感じてきた。しかし、今回の研究を通してその原因が見えてきた。子供たちが21世紀をたくましく豊かに生きる資質・能力の育成を効果的に、そして着実に図るためには、授業改善に加えて子供たちに育みたい資質・能力を明確にしたカリキュラム編成が欠かせないのである。しかし、カリキュラム編成は、学校の全教育活動を視野に入れて考え、実践によって修正を重ねていくことでできてくるため、そう容易に一朝一夕にできることではない。したがって、今後は、「実践することによって、学ぶ」というスタンスで総合的な時間との連携による道徳の授業づくりの研究を深め、試行錯誤を繰り返す中でさらなる道徳的資質・能力の育成に努めていきたい。

---

#### 参考文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領」（平成27年3月一部改正）
- ・文部科学省小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」（平成27年7月）
- ・文部科学省「小学校学習指導要領」（平成29年3月）
- ・文部科学省教育課程特別部会「論点整理」（平成27年8月）
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの真義のまとめ」（平成28年8月）
- ・文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」（平成22年11月）

「主体的で、対話的で、深い学び」に基づく 道徳的資質・能力を育む授業改善

- ・東京都教職員センター「多様な教育課題に対応したカリキュラムモデル」(平成27年9月)
- ・東京都教育委員会「教育課題等研究開発委員会指導資料集」(平成23年3月)
- ・押谷由夫著「総合単元的な道徳学習」(株)東洋館出版社(平成9年3月)
- ・「アクティブ・ラーニングを考える」(株)東洋館出版社(平成28年8月)